

名誉教授 多田鐵雄 経歴年譜

明治三八年(一九〇五年)

一〇月二七日 東京市神田区表神保町一番地(現在・神田小川町一)に房之輔四男として生れる。

明治四三年(一九一〇年)

自宅の二階廊下の手摺に登っている内に墜落し、竹の切株と庭石の間の三尺平方の平地に直立して九死に一生を得る。墜落の途中で片手が階下の屋根の樋にかかったため、この姿勢になったと思われる。ただしそのために後遺症として脱腸となり、小学校一学年の時、手術を受ける。

明治四五年(一九一二)

四月 神田区小川尋常小学校に入学する。

大正六年(一九一七)

四月 一家が北豊島郡巢鴨村字池袋(現在、豊島区西池袋一丁目)に移転のため豊島師範学校付属小学校六年に編入学する。

全校を卒業後は同窓の故根岸国孝本学教授らとともにその同窓会の仕事に従事して現在に至る。

大正七年(一九一八)

四月 東京府立第一中学校に入学する。

入学式・対面式のため運動場に全校生集合中、行進体形に移るため二列横隊より四列縦隊移行の号令がかかったが、新入生たちで不慣れのため正しく隊伍が組めず、その正否を大声で説明している処を体育教師に咎められ、全校生環視の中で行進からはずされ、列外に出てその場で直立と云う懲罰を受け、これがその後の中学生活に大きな影響を与えた。

ただしこのために注目され、上級生、殊に四、五年生の有志からは逆に特別の愛顧を受けるに至った。

大正八年（一九一九）

自らは好意を以て接したつもりの一・二の同級生に対する横暴の理由で、彼等の言に同情した故佐倉潤吾氏（本学卒、朝日新聞論説委員）より呼び出しをうけ、お茶の水の文化学院横の空地にて鉄拳の制裁を受ける。この件についてはその後和解したが、人間の心理の微妙について深い感慨を受ける。

この頃より日本基督教独立巢鴨教会に出入りし、田村直臣牧師の説教を聴く。

大正一〇年（一九二一）

巢鴨教会にて田村直臣牧師より洗礼を受ける。ただし後年に同牧師が死去し、独立巢鴨教会が日本基督教団に寄附の形で合併されて以来、これと袂を分かたず。

大正一一年（一九二二）

松原至大氏に認められ、短詩を東京日日新聞（現在、東京毎日新聞）学芸欄に発表する。稿料金参円は生れて初めての収入であった。その後一兩年に亘り三回発表する。

この頃に故菅能啓一・伊藤罔夫（千田是也）氏らと同人雑誌を作り、短詩・短歌などの習作をのせる。

また内田栄一氏につき声楽のレッスンを受け、約三ヶ年これをつづける。

大正一二年（一九二三）

三月に府立一中を卒業し、四月より同校補習科に学ぶ。浪人生活一年。

この時代に臨時教師の藤森秀夫氏によりゲートルへの関心を眼覚まされる。

大正一三年（一九二四年）

四月

東京外国語学校本科独乙語部法律選修科に入る。武内大造・辻高衡・田代光雄諸教授からドイツ語の薰陶を受ける。

文芸部員・サッカー部員として校友会員生活を送り、卒業に際しその功により表彰を受ける。

大正一四年（一九二五）

四月より一年間、同校専修科（夜間部）でフランス語科を併修する。

徴兵検査を受け甲種合格となるも、連隊長の示唆により士官候補生の志願は取りやめ、間もなく兵役免除の通知を受ける。これによってその後の時局の進展にしたがい、多くの学友の召集・戦場派遣・戦死の報などを兵役に関係のない立場で受取ると云う複雑な心境を経験するに至る。

大正一五年（一九二六）

舞台協会の山田隆弥、岡田嘉子氏に紹介され、五月の東大の山上御殿における同協会のページェント公演において、その「アルト・ハイデルベルヒ」にドイツ語部の同級生十数人とともにハイデルベルヒ大学生として出演し、また次の出し物「ジュリアス・シーザー」でも「その他大勢」で客演する。

昭和二年（一九二七）

三月に東京外国語学校本科を卒業し、四月に東北帝国大学法文学部本科に入學する。

四月よりサッカー部に入り、予選を経て明治神宮外苑競技場で行われた全日本学生選手権大会に出場し一回戦で敗退する。その夏の同部の北海道遠征の途次、感ずるところあり、退部帰京する。

九月に独文学専攻を決意し、小宮豊隆教授の水曜会のメンバーに加わる。

ゲートル研究を志し、小宮豊隆・阿部次郎教授に、師事し、小牧健夫・河野与一教授から種々指導を受ける。教

育学について篠原助市教授の教えを乞い、とくに児童心理学研修に関しその示唆を受ける。

昭和三年（一九二八）

専攻の独乙文学のかたわら、山田孝雄教授の万葉集、岡崎義恵教授の西鶴、河野与一教授の仏文学（モリエールなど）において啓発される。

鈴木三重吉氏の作品に興味をもち、小宮教授の紹介で同氏の門を叩く。

同人雑誌「木星」四月号に短編「政子の心持」を発表する。

昭和四年（一九二九年）

母多田キウとともに父に代り私立池袋幼稚園設置者となる。

昭和五年（一九三〇）

三月

卒業資格取得に必要な科目として石原謙教授の哲学特殊講義「アウグスチヌス」を選び履修し来たったところ、この科目の履修者が哲学専攻のゼミナリステンのみであったため、レポート提出日を知らずに過ぎ、罰として大部の哲学書に関するレポート提出が命ぜられ、河野教授の助力でレポートを作成し、小宮教授の奔走で辛じて卒業資格を得て卒業する。

四月

遠藤隆吉博士の巣鴨高等商業学校教授となりドイツ語を担当する。
私立池袋幼稚園主事となり、幼児の知能・性格の検査を担当して現在に至る。
東京帝国大学文学部大学院入学を許可され、ゲーテ研究をテーマとする。在籍すること二年。
右の期間および外国語学校在学期間を通じ、帝国教育会主催の夏季・冬季講習会に毎度出席し、教育学関係科目の講義を吉田熊次、深作安文、林博太郎、入沢宗寿その他の諸氏から聴く。
この年、菊地和子と結婚する。

昭和七年（一九三二）

四月から一年間、生活緩り方の趣旨で教育実践を希望し、巢鴨商業学校第二部(夜間部)で作文の授業を担当する。
この年、高等商業学校生の試験不正行為があり、緊急教授会(当日出校の教官による)で一ケ年の停学処分が決定されたことに対し、教育的にこの処分が問題があると痛感して、ただちに直接に遠藤校長にその所以を訴えたるも斥けられ、教師の当為について深く考えさせられる。

昭和八年(一九三三)

九月

この年四月に文部省に教育調査部が設置せられ、先輩田内静三氏(当時文部省嘱託、元国立博物館次長)からこの機関が教育の調査研究を主とするものである故を以て入部志望することを薦められ、故下村寿一(元文部次官)、故成田千里(元東京豊島師範学校長)諸氏の尽力により九月より兼任嘱託として入部する。村上俊亮氏(元東京学芸大学長・国立教育研究所長)の下で主としてドイツの教育制度を調査研究する。

昭和十一年(一九三六)

四月

恩師田代光雄教授の推薦により、従来同教授が担当せられていた東京商科大学付属専門部のドイツ語を代って担当することとなり、同学付属専門部講師となる。

昭和十二年(一九三七)

九月

教育調査部における調査研究に引続き参与する条件のもとに督学官助手の任務を担当するため、普通学務局および督学官室の事務嘱託となる。仕事は督学官の命ずる資料の作成、視察同行、その記録の整理などであり、この仕事は諸教育機関の実態を学ぶ点で大いに意義のあることであった。

昭和十四年(一九三九)

三月

巢鴨高等商業学校を辞任する。

六月

督学官室勤務を退き、教育調査部嘱託に復帰する。

昭和十五年（一九四〇）

この年より三年間、その間の上司たる安達禎教育調査部長、村上俊亮主任、加藤与次兵衛督学官、松久義平督学官などの好意と理解により、本来の業務のほかに幼児保育制度の調査を一任され、実地視察・資料収集に当り、昭和十七年その一端を文部省刊行物「幼児保育に関する諸問題」としてまとめる。

昭和十六年（一九四一）

この年から二年間、日独文化協会囑託としてドイツ教育事情の調査・研究に協力する。前年度および本年度にわたり、中央社会事業協会社会事業研究所・愛育会愛育研究所の保育施設調査研究委員となり、昭和十七年刊行の「本邦保育施設に関する調査」作成に協力する。

昭和十七年（一九四二）

一月 文部省の官制改正により教育調査部が廃止され、調査機関は総務局調査課となる。したがって身分はこれに移る。

昭和十八年（一九四三）

数年前から督学官松久義平氏、普通学務局初等課員中谷千蔵氏らとはかって、幼児保育制度の改善を努力したが、戦時中の勅令改正は無理と云うことで、高等女学校付属施設として保育所の名のもとに保育施設を設置しうることにして、幼稚園と託児所の統合化の方向への第一歩を打ち出すことになり、これが採用されて幼稚園または保育所を付設することが出来る「高等女学校規程」が三月に制定された。

昭和十九年（一九四四）

四月 帝国教育会が改組された大日本教育会の幼児保育専門部会常任幹事となり幼児保育振興に協力する。本学名誉教授山口茂氏の尽力により東京商科大学付属工業経営専門部教授となり、ドイツ語および教育行政を

担当する。

昭和二〇年（一九四五）

七月

文部省の総務局が解体され、調査機構は大臣官房文書課（九月から翌年三月までは総務室）に移される。

昭和二二年（一九四六）

四月一日付で文部時報編集委員を命ぜられ、文部省退任までこれに当る。

東京の私立幼稚園団体の再結成に参画し、東京都私立幼稚園協会の設立とともにその役員となり、そのあとその役員または委員として現在に至る。

昭和二二年（一九四七）

一月

前年一月に調査局が新設されたが、これにともない同局の兼任事務官（無給）となる。

文部省より幼児教育内容調査委員を嘱託され、米国 C I E の示唆のもとで幼児保育の指針「保育要領」の作成に協力する。

三月

東京商科大学講師を嘱託される。

十一月

公私立の幼稚園団体、公私立の保育所団体の連合体たる全国保育連合会の結成に協力し、一月設立されてから昭和二八年解散までその役員をつとめる。

昭和二三年（一九四八）

前年に結成された日本私学団体総連合会に加盟するために、都道府県私立幼稚園の連合体たる全国私立幼稚園団体連合会（日私幼）を結成することに協力し、その設立とともに評議員となり、その後は役員または委員となって現在に至る。

昭和二四年（一九四九）

新制大学として発足するに伴い、一橋大学助教授となり、教育行政学を担当し、かたわらドイツ語を担当す

る。

日本保育学会が結成され、その正会員となり、その後役員をつとめ現在に至る。

昭和二十七年（一九五二）

国立教育研究所より全国小中学校学力水準調査委員を委嘱され、この調査に協力する。

六月 本学の教職課程委員会常任委員を命ぜられ本学学生の教育実習の管理を担当し停年退職までこれをつとめる。

昭和二十九年（一九五四）

一橋大学教授（社会学部）に任ぜられる。

昭和三十年（一九五五）

二月 大学院社会学研究科（社会学特殊問題）の担当を命ぜられる。

昭和三十一年（一九五六）

七月 琉球政府および文部省より沖縄の小中高教員に対する沖縄夏期認定講習会の講師を委嘱され、那覇市および石

川市で計四十日の講義を担当する。

昭和三十三年（一九五八）

二月 人事院規則改正により兼任の文部事務官を免ぜられ、調査員に併任される。

昭和三十七年（一九六二）

四月 文部省在外研究員として四ヶ月間、ドイツを中心に欧米各国で教育制度、教育事情を視察研究する。

右の期間中、七月英国のロンドンにおいて一週間にわたり開かれた世界幼年教育機構 Organisation Mondiale pour l'Education Prescolaire（略称 O M E P）の第九回世界会議に日本代表の一人として客員の資格で参

加する。

昭和三九年（一九六四）

六月 文部省在外研究員として三ヶ月間、ドイツを中心に欧米の特に職業教育制度および事情について視察研究する。

右の期間中に八月にストックホルムで一週間にわたり開かれたO M E Pの第十回世界会議に準加盟国連絡員として出席し、日本の幼児保育の沿革・現状・問題点について発表する。

昭和四一年（一九六六）

七月 文部省在外研究員として二ヶ月間、ドイツを中心に欧州諸国における大学制度を視察研究する。

七月にパリにおいて一週間にわたり開かれたO M E Pの第一一回世界会議に日本連絡員として出席し、日本の正式加盟を申入れる。

昭和四二年（一九六七）

四月 成城大学経済学部の非常勤講師となり、教育学・教育原理を担当する。

昭和四三年（一九六八）

三月 文部省の調査員を辞任する。

七月 文部省在外研究員として二ヶ月間、ドイツを中心に欧米における幼児教育制度、教員養成制度を視察研究する。

八月初旬より一週間にわたって開かれたO M E Pの第二二回世界会議に、その正式加盟国たることを承認された日本の代表の一人として出席する。

昭和四四年（一九六九）

三月
四月

停年により一橋大学を退職する。

一橋大学学則により、一橋大学名誉教授の称号を授与される。

成城大学経済学部教授に任ぜられ、教育学・教育原理・ドイツ語を担当する。

前年に死亡した妻和子前園長に代り池袋幼稚園長となる。

(付記。この年譜を通して、人間の生涯は本人の能力・努力のほかに、その運命と、その師・先輩・知人・友人・後輩など種々の方面からの好意と善意にささえられて展開して行くものであることを跡付けたく、かかる記述にした。なおこのほかに本人が恩恵を受けた多数の人々の氏名を右の記述中であげ得なかつたことを遺憾とする)。